

こども家庭科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）  
分担研究報告書

専門家が保育相談をおこなううえでの視点を探る

分担研究者 勝浦真仁 桜花学園大学 保育学部 教授

研究代表者 上田敏丈 名古屋市立大学 大学院人間文化研究科 教授

研究要旨

本研究では、保育相談をしている方と関係発達論的観点から巡回相談をしている筆者らとが語り合った内容を検討することを通して、巡回相談をする上で専門家間にどのような観点があるのかを明らかにする。

研究協力者は、ある地域で言語聴覚士をしている田中さん（仮名）である。結果として、こどもに目を向けていく志向性及び課題の解決に囚われすぎず、子どもが今の状況をどのように理解して、その持てる力の中でどのように動こうとしているのかを保育士や保護者と共有していくことが、2人の語りの共通項として浮かびあがった。またコーディネートできる地域の人材がいるかいないかはシステム上の重要な環境であることが示された。

A.研究目的

近年、保育現場において保護者対応の必要性・重要性が高まっている（勝浦・上田，2021）。その一方、これらを原因とした保育士の離職も増えてきているとされる。配慮の必要な保護者とより適切な関係を気づくために、園としてどのような組織的対応が可能となるかについて検討していくことが必要と考えられる。

保護者とかかわっている保育士の抱えている困難感に対して園全体として対応しようとき、その1つの方策として巡回相談が活用されることがある。巡回相談とは、保育士の抱える問題を解決するために専門家が保育士に相談援助を行い、コンサルテーションが図ることである。コンサルテーションの中には、配慮を要する子どもだけでな

く、保護者対応も含まれており、これまで数多くの実践が積み重ねられており、保育現場への様々な還元もなされてきた（三山，2013）。

しかし、専門家の理論的背景によって、何を焦点に据えるかが異なってしまうと、保育現場に困惑を生じかねない。例えば、ある子どもに対して、専門家のA先生は行動改善のために刺激の少ない環境やかかわりを求めるが、違う専門家のB先生は周囲の子ども同士の交流を通して発達を促すように提案するといったような食い違いが生じることは、保育の一貫性がなくなってしまう、保護者にも困惑を生じかねない。

専門家はどのような観点から園での巡回相談を試みているのだろうか。心理士や言語聴覚士、作業療法士など様々な立場の専

門家がいるために、具体的な巡回相談の視点が十分に検討されてきたわけではない。本稿では、言語聴覚士として巡回相談をしている方と関係発達論的観点から巡回相談をしている筆者らとが語り合った内容を検討することを通して、巡回相談をする上で専門家間にどのような観点が共通にあり、また違いとしてあるのかを探り、特に、配慮が必要な保護者への対応についてどのような実態であるのかを明らかにすることを目的とした。巡回相談にかかわる2名の語りが交叉することで、どのような観点が浮かび上がってくるのかを探る萌芽的試みであり、今後のよりよい子育て環境に貢献していく上での基礎となる研究として行った。

## B.研究方法

研究協力者は、ある地域で言語聴覚士をしている田中さん（仮名）である。非常勤の掛け持ちで職にあたられており、児童発達支援施設、病院のリハビリテーション、小児外来、市や町の園における巡回相談、乳幼児健康診査後のフォロー相談（・フォロー教室などの仕事をされている。

X年12月およびX+1年3月に、それぞれ約80分ずつのインタビューを行った。1回目のインタビューはzoomによるオンラインで行い、2回目のインタビューは対面にて行った。ここでの発話は文字化され、以後の分析の基礎となった。文字数は、インタビュー1回目が約23,000字、2回目が約24,000字であった。1回目のインタビューについては、分析についての妥当性を高めるために、第2著者と行った。なお、逐語録について、文意を変えることが無いように留意しながら、分かりにくいと

ころについては、カッコで補足するなどして若干の修正を行った。

本研究では語り合い法（大倉，2008）をベースとすることとした。語り合い法とは、協力者の「その人らしさ」を捉えていくにあたり、逐語録的な分析にとどまらず、インタビューの場において、間身体的・間主観的に調査者に感受されたことを積極的に呈示しながら分析することにより、協力者の体験世界に迫ろうとする方法である（大倉，2011）。本研究においても、言語聴覚士である田中さんとは巡回相談における立場の違いがあるため、その違いを浮かび上がらせつつ、共通する観点を見出していくために、何を感じながら巡回相談を行っているのかを協力者と筆者の対話から探る【メタ観察】を実施する分析方法を用いることとした。この分析について、第2著者、第3著者とも検討を重ねることとした。

倫理的配慮として、インタビュー調査を始める前に、本研究の目的および手順を書面および口頭にて研究協力者に説明した。また、研究への参加は協力者の自由意志であり、拒否における不利益はないこと、途中で辞退することも可能であることを伝えるとともに、研究の公表にあたっては、個人情報保護に十分留意することを伝えた。その結果、研究への協力および本研究の内容の公開について書面にて同意を得た。

## C.研究結果

1) 語り合い1：コミュニケーションの質に目を向ける

<背景> 保護者対応が難しいケースについて語った後に、田中さんが言葉の問題を入り口として、発達において心配などこ

ろを掬い取っていこうとするアプローチであることを述べていた。私1)もそのアプローチに納得する一方で、言語面の問題なのか行動面の問題なのかの見極めが難しいケースもありうるのではないかという考え、どのように見極めをされているのかを尋ねることとした。

【メタ観察】第1筆者が巡回相談をしていく中でも、配慮を要する子どもがドッチボールなどのルールのある遊びを理解することが難しいという保育士の声を聞くことがある。言葉でのやりとりはできているはずなのに、なぜ伝わらないのかが分からないという困り感を訴えてくる保育士の方が複数いた経験がある。

この経験を田中さんとの語り合いを通して振り返ってみると、日々のコミュニケーションにおいても子どもの理解を伴わない言葉かけ、声かけになっている可能性が浮かび上がってくる。状況を通しての理解を子どもがどこまでしているのかが重要であり、田中さんはそれを見極めていこうとしていることが伝わってきた。

保育巡回においては主訴というかたちで、保育士が子どもや保護者に対して困っていることや難しさを感じていることが伝えられる。基本的には、その主訴とされることについてのコンサルテーションを図ることは巡回相談にくる専門家の第一義的な役割であろう。ただ、コンサルテーションをしていくためには、その子どもや保護者の状況や背景を理解していく必要があり、できる行動が増えたかどうか、分かっているかどうかばかり目を向けられていては、子どもが苦しむ結果になってしまうという田中さんの指摘には説得力があり、賛同するも

のだった。

## 2) 語り合い2：専門家と保育士との連携

＜背景＞子どもについて、保護者と共有しづらいケースを語り合う中で、田中さんが各方面と丁寧にコミュニケーション取っていた。田中さんの言葉では、「いろんな現場をまたいでいくスタイル」と述べており、関係者が同じ方向を向いていくことで、教育と福祉の連携がスムーズに行われていた。その背景について尋ねてみた。

＜メタ観察＞教育と福祉の連携の重要性が昨今より言われるようになってきているが、第1筆者にとっても、保育士や多種多様な専門家がどのようにして、方向性を一致させていくのかは課題に感じていた。田中さんの地域ではそれがスムーズにしているように感じられたので、その背景を探ってみたところ、田中さんのように子どもの状況に合わせて柔軟に動き、地域の様々な立場の専門家とつなげていくコーディネーター的存在の人が重要であることが浮かび上がってきた。たしかに地域性もあり、子どもの人数の問題や、つながりのある専門家が顔見知りになるケースの多い場所の場合には、より情報交換が容易となると考えられる。一方で、第1筆者が担当していた地域は人口がある程度多く、専門家も多い地域であったために、このような情報交換がスムーズに行くとは限らず、記録による情報伝達が大きなウエイトを占めていた。巡回

相談をしていく上でも、コーディネートできる地域の人材がいるかいないかはシステム上の重要な環境であると考えられる。

とを継続的に行っていくこととしたい。

#### D.考察

ここまで2つの語りを取り上げ、田中さんと第1筆者との語り合いを通して見出された、巡回相談において共通する観点と相違する観点について、その一端を取り上げてきた。

本稿で浮かび上がってきた観点として、語り合い1からは、子どもが実感をもって行動しているところに目を向けていこうとする志向性、および、課題の解決に囚われすぎず、子どもが今の状況をどのように理解して、その持てる力の中でどのように動こうとしているのかを保育士や保護者と共有していくことが、2人の語りの共通項として浮かび上がってきた。語り合い2では、コーディネートできる地域の人材がいるかいないかはシステム上の重要な環境であることが、第1筆者が巡回を行っている地域との違いから浮かび上がってきた。また、保育の営みの難しさを理解した上で、どのように伝えることが保育士に受け入れてもらいやすいのかという課題が両者に生じてきた。

#### E.結論

本稿で提示した以外にも検討すべき語りがある点も多くあり、包括的な議論がまだできない点が不十分である。今後も語り合いを丁寧に吟味していくとともに、他の専門家との語り合いも検討していくことで、巡回相談における観点を明らかにしていくこ